

特集にあたって

高森 寛

日本の製造業は、今日まで、優れた技術・製品開発力、製造技術を築き、国際競争力を確立するとともに、TQC、改善活動、カンバン(ジャスト・イン・タイム)方式など、欧米諸国の製造業に類を見ないユニークな製造ノウハウを創出してきた。そして、それらは、終身雇用の慣習、特有の給与体系、企業間の永続的取引関係や系列関係など、わが国特異な企業内、企業間文化に支えられ特色づけられてきた。しかしいまや、雇用習慣、給与体系などに流動化の傾向が見られ、また、日本企業の生産活動は、今後、生産拠点の海外への移転など国際化、グローバル化の傾向を加速してゆくと思われる。

製造業をとりまく技術環境、市場環境は、今後どのようなものになっていくのであろうか。日本企業が、将来も、国際市場での競争力を維持するためには、これからどんな問題に直面し、また、どのような課題にとりくむことが必要となってくるのであろうか。

この特集では、5人の方々をお願いして、日本の製造業について、その特質やその経験から得られた教訓、将来予測、問題提起、問題の所在の指摘などに関連して、ご執筆いただいた。

まず、唐津氏は「経済の原点・技術」と題して、市場の創造につながる製品開発と開発サイクルの短縮化、製造技術のたゆみない革新、革命的なコストダウンの実現など、日本製造業の技術力の核心に迫っていられる。東西世界の緊張緩和、軍需産業から民需への転換、EC統合など、構造変化が予想されるこれからの国際市場で、技術力こそが日本企業の国際的地位を支える原点であることを強く訴えていられる。

岸田氏は、「知恵」の「進化」が求められる」と題して、国際的な比較において、日本の技術力を評価し、また、わが国の社会・文化的特質の展望のなかで、その技

術力のめざましい進展の秘密を分析していられる。これからの高度情報化社会という舞台上、技術革新は、どんな要因に促されて展開するかを論じていられる。さらにいまやあらゆる側面で、地球規模での「有限性」に直面する時代となって、いままでにない新しい知恵が求められていることを訴えていられる。

石井氏には、「ニューハードウェアとホロニック・パス」と題して、日本製造業が世界に示した産業革命以来の製造パラダイムの転換を明らかにしていただいた。人間の歴史上はじめて大量生産・大量消費の黄金時代を築いたアメリカでは、「製造の問題はすべて解決した」というガルブレイスの言葉に象徴されるように、1960年代以降、テイラー型のパラダイムが定着し、製造革新は停止した。ハードとソフトは硬直的に分離し、ハードのモノづくりは次々と海外生産へと格下げされていった。まさしくこの時期に、日本製造業では、情報機能、知的機能を吸収・融合するニューハードウェアが創出され、モノづくりは活性化されてきた。さらに、柔構造のホロニックな生産システムは、日本から世界に提唱される指導理念であると論じていられる。

薬師寺氏は、「国際システムの変化と技術」と題して国際政治学の観点から、日本技術力の台頭は、これまでの米国主導型の国際覇権体制を崩壊させる要因であると分析していられる。対日ハイテク脅威論に見られるように、米国は「日本封じ込め」の動きを強くする可能性があるが、これまでは米国主導の体制のもとに利得を享受してきた日本は、いまやハイテク緊張緩和(デタント)へ向けて方向転換すべきであると論じていられる。

今井氏は、「製造業と人材育成」と題して、日本の優れた製造技術と、その競争力に直面しての最近の欧米の対応などを紹介し、工業教育、人材育成の重要性を指摘していられる。

たかもり ひろし 青山学院大学 国際政治経済学部

〒150 渋谷区渋谷 4-4-25